

日本書紀第十四

雄略天皇

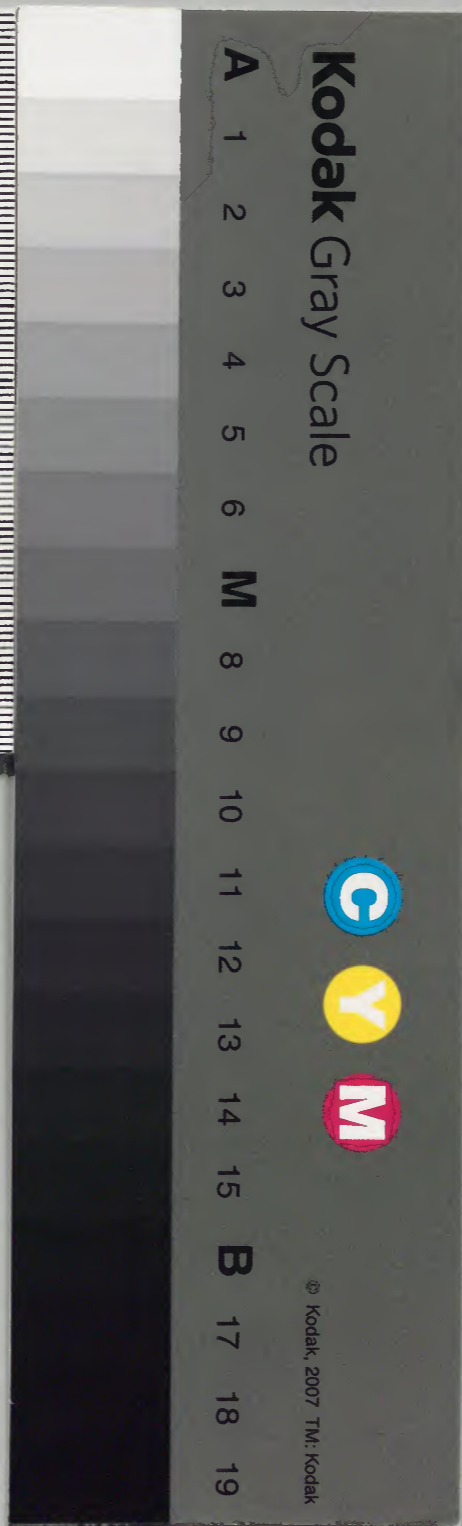
十三

逸

太政官文庫			
和書門	特別	三二〇九九號	茅子書函
	類	架	三二册

内閣文庫			
番號	和	32099	
冊數	32 (16)		
函號	特	55	12

共廿二



日本書紀第十四

雄略天皇



ゆづりみかき天皇みからきと一統一統に
この月御馬皇子性選の皇子三輪君身狭不意り
うたりにしおととみみららと
いとむとほ一御伊とまはあひあつぬ道よ
ふつりくさあつく三日のいと井の側側め
あひあつかふ久一とびとてさうりさこ
ゆづりみかのそんぬ井とさうてとこむて
云この水いおゆんぬのこぬぬのじい
とらんやむとのきいさるむとひとえのま

十一月の元祿乃朔三日元祿の日天皇つ
余石目一まう節くあつは日つきたるま
は井ぬ文とこくあつ平郡信吉鳥とめて
大臣おほのとが大臣連室屋物部連目とらぬ
大連おほのとが
元年五月三月かのえいぬ乃朔三日の元祿乃日
草香幡くさかうの榎姫いぬの皇女みかひめ橘姫たちばなとめて皇太后
あつまふの月とりの妃とたかゆ元妃

はつらのまら

しづきろ國大臣のしづめ韓媛とす

と白髪武廣國押稚日本根子天皇と稚

是姫のむめえはつらのまらと生り落りこの

むめえとし伊勢の大神乃祠みさきつり次母

吉備の上道長がしづめ稚媛らんあり

舌の産をはつらのまら二つ一姓のいこみこを生ませり長

と磐城皇子とまうしはつらのまらと星川稚文のえ

あたまうとはつらのまら次母春日乃和珥長深目か

しづめらんあり童女君と海らとはつらのまらと目大

娘皇女はつらのまらと生り落り童女君しりし

らと采女なり天皇一和えありてはつらのまらと

里所井み女子を生りはつらのまらぬ天皇とひ給

ふとはつらのまらと生り落り女子ありはまはときり

らと天皇大殿みたりはつらのまら物部目大連

らと里女子産成るゆと目大連とあり

海らと多他みりてはつらのまらと

女子古入りありはつらのまらと

とありはつらのまらとありて清をあり多しと

乞ふとのうり

二年秋七月百餘の池津媛天皇のめさると

とふめあづひまらりて石河指石河のたぐ 旧本云石河 股合首祖指

みめしちあ天皇おほきめいらりまして大伴

室屋大連めえとめりして来目部とて

夫婦の口交と本めらりて假廢乃上めと

取と火ととてやまに給一り

百濟新撰云はちのとうえのう益園王

天皇阿禮奴跪とまらりてきりりて女部

と百濟めりし慕尼夫人の女と適藝

女とまらりて成りて乞ふらりて天皇よ

めらりて

冬十月かめら乞はけの朔の日のまらり

日吉野のまめいそまら乞のえ祢乃日馬

瀬みいでまらて虞人おほてりし給ふ

乞ひよめらり乞ひらりておほきいまる日

乞ひらりておほきいまる日

乞ひらりておほきいまる日

井林泉いんせんめりりいりて藪やぶはめも相ゆり
 あそあそをあそめりり年としとやとめ車馬くるまとかぞ
 其他ほかささらちり母ははりておおままのくくりりめめの
 ありありいいのの胎たままとてとななままははくくししんん
 自みづからら色いろめめははくくりりんんももららききここちちららええんんとと入い
 中ちゆうささららくくめめ天てん皇わう大だいいいりりままりりててカカと
 ぬぬいいくく御おん者しや大だい津つ馬ば飼かいととささりりたたままりりのの
 日にち車くるま駕がよりより一いちりりややららいいりりまますす國くにのの
 肉にくよよありあり民たみここしくしく冬ふゆみみかかららいいああるる是こゝろ母はは
 小このの皇わう太后たうとと皇わう后こうとと記きりりししてて大だいにに
 ちちらら給たまははいいらら采さい女にょ日にち媛わらわととてて海うみととささりりてて
 ててじじんんめめととままりりしし天てん皇わうらら孫まごめめののりりかか
 端はなは簾すだ 形容けいようととややわわららととみみををかかりりてて
 ととかからら他ほかららちちりり部ぶととままりりてておおままののほほりり腹はらああ
 和わ顔がん 悦えつ色しき 温ぬる雅みやび
 小こ女にょめめらられれええままいいととええままくく何なにらら皆みなままりりとと
 りりままひひててととかからら他ほかああいいめめ列れつととてて後ご交かうりり
 入いままぬぬおおのの身みををさされれめめととししてておおままりり今いま
 日にちののかりかりめめおおのの身みををささりりてておおままりり今いま
 返かへ籠かご 念ねん 歎たん

臣とて御に侍多御て燈の御食御んとらるる
御も地きことたちえらるる御中と御
朕いらはを御すまふ御太后の御みと御り
うら御と志うりて天皇と御たてまつり
御の御海に御りて御りて陛下の御りあ
そい御りて場御言人部と並た御りん
お御りて御りて御りて御りて御りて御りて
とて御りて御りて御りて御りて御りて御りて
とらりたりも御りて御りて御りて御りて御りて

今御りて御りて御りて御りて御りて御りて
御りて御りて御りて御りて御りて御りて
御りて御りて御りて御りて御りて御りて
人の御りて御りて御りて御りて御りて御りて
御りて御りて御りて御りて御りて御りて
とみそふりて御りて御りて御りて御りて御りて
御りて御りて御りて御りて御りて御りて
人免田御りて御りて御りて御りて御りて御りて

備に色し人あつりつり害人部とせん
こいまりつりあつりつりあつりあつり
國造吾子孫宿祢狹穗子鳥別とたてま
里て害人部とて國連伴造國造まゝ
ひきてたゞつりつりこの月史戸河上舍人
部とて天皇家みろりつりつりつり
まひあやまりて人成るあつりあつり
天下を里てまゝつりつりつりつり
まゝ備と天皇なりとあつりあつりあつり

史部身狭村主吉槍隈民使博法亦也

三年夏四月阿用臣國見磯特牛播磨守

女湯人廬城部連武彦とて讀まらる

武彦皇女とて行りまゝ里てあつりあつり

里と武彦が父根菖喻この行てあつりあつり

もろろの身の身めとよじんととねとて武彦

と彦城河女誘卒てらうつりあつりあつり

さてあつりあつりあつりあつりあつり

一に天皇なりつりあつりあつりあつり

皇女いりかとらんぐとりー先給ふ。宝たからめみこらへん
 てまうししめく葉まうくやうれ妻よめいふと俄にやにして
 宝たからめえこ神鏡あやこころとりらてみ中鈴河上いそがは待まちま
 して人のありぬおとらふひてかぶんと
 けいもめとらふ死しぬ天皇いあみあふいと
 うい宝たからめ給て経に給ぬやこ夜ぬとま海うみか
 さ海うみももめ給ふとまかへ使河上しは虹にのん東西ゆ
 とと蛇あちらのいしとあてはよつえい丈夫しやうぶむらりもの
 あり虹に乃の海うみ川がは知ちとありてあや神かみ死しか
 とえるありうつりおくこといまるさ候さうはして
 皇女いりかの屍しかばねとえく割わてられとみま腹はらの中
 み物あり水の中ぬ石いしあかぐとくこころ根ね草くさ喻ゆ
 らまゆとてみうはとまきとまきとえとま
 くれてみまと給とくはくいと目め見みとひひ
 こらんとく石いし上の神かみ交まりあげられぬ執
 四年春二月天皇うつれ山やまみりーたまふ
 ぬ地ちまらふよまけたらきとん長とん長とん長とん長
 たまじくも小あひのそありか丹谷と谷い天皇

丹谷

を

西 詠 答 候

あめりこまり。天皇の神なりと志路一先
相似
瑞とをた紙衣のこころをてぬはりく何
はこの公が長人なりとぬはりくあ
現
人神を先王の律とあの色をふとてぬ
ぬいしひ天皇のこころ中たたりも朕が
應導
幼成なるなりとぬけたる人けりり
ぬりてのぬはりく僕もあ色一事主神な
里とほ井ぬとにかりたのこむて一鹿
盤干遊田
とりにあひこころもくやとあ何とと抱づり
驢

あむじのくちとなしてむとといやト
響
をほしんぬ逢仙のこころなりとありこぬ
格
日られりやきて神天皇とあをくらたて
つりて来目水もあこころもぬこのこぬ
おほんぬみかぬさくいさかをま
有徳
と天皇なりと。秋八月かめとらうの朔つら
れえさうの日。燈の文ぬいでまたかのえ
行幸
いぬの白河上の小野ぬいでまて。虞人
マヤツ
とぬりして黙とて射んと

とくし〜や〜のまの
をぬとわ〜海〜

〜
地

六年二月天皇かほ〜山〜

〜
靈

乃行海〜
尾〜
地

乞きり且鳴つ〜
怒

〜
頃猪お〜
草の中〜

海ぬおて人と〜
樹〜

おび懼天皇と祈りぬえ〜

〜
猛獸も人〜
止

し〜
送射て〜
性

おら〜
樹木のわりて失色〜
情無主

〜
嗔猪ぬ〜
天官と口

〜
天皇み〜
判

〜
紙河けて〜

〜
全人〜

〜
尋と〜
作

庭とるしーしーおのめまのあそびし
あしーのうらまきあしーいんじょうあけのあり

ありとろくのうらまきあしーあし

皇太后こうごうよりみねて見おろすとあし

あしあしとまろろおんことありして乃

たすろく皇太后こうごう天皇てんおうみくろおろして

舎人しやにん越人こしやにんみねとあそびて中ちゆうあしりく

皇人わうにんみか海うみうさくせき陛下てんかりたまひあまあし

このうらまきあしーあしやうさろろ今いま陛下てんか

嗔猪ちんしゆ乃ゆくとしておろろとあしたまひ

陛下てんかあしあしとあしあしあしあしあしあし

天皇てんおうよりあし他た皇太后こうごうとあし車くるままたあ

里さとて人ひとりあしあしとあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあし

夏なつ月つき百ひゃく謙けん乃加須利君かすりきみ蓋國王はてくにわう池津媛いづひめ

あしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあし

志らぬとて母を^{おぼ}祓^{はら}なりて我國のりて
 一なり今よりおぼせられ女としてまら
 一はとてか^か他も才^{えん}軍^{ぐん}君^{きみ} 魏支君お若て云
 汝^なし^し日^ひ下^げふ^ふあ^あう^うて^てり^りと^と天^{あま}皇^{みかど}おは^はら^ら
 是^{こゝ}軍^{ぐん}君^{きみ}ら^らと^とも^も云^い上^{かみ}君^{きみ}の^の見^みれ^れた^たら^らも
 なる^{なる}に^に祓^{はら}が^がら^ら君^{きみ}の^の婦^{むすめ}と^とも^もなり^{なり}
 母^{はは}媛^{みこ}お^お海^{うみ}に^にた^たて^たま^まら^らは^は加^か須^す利^り君^{きみ}と
 なる^{なる}他^た母^{はは}婦^{むすめ}と^とも^もて^てと^とで^でも^も軍^{ぐん}君^{きみ}よ^よあ^あら^らは^はら^ら
 て^て云^いら^らは^は母^{はは}婦^{むすめ}と^とも^も云^いら^らは^は月^{つき}よ^よあ^あら^らは^はら^ら
 り^り路^ちお^おわ^わら^らら^らま^まら^らは^は祓^{はら}が^がら^ら一^{ひと}船^{ふね}り
 り^りと^とも^も云^いら^らは^は海^{うみ}に^にく^くは^はら^らお^おわ^わら^らは^はら^ら
 云^いら^らは^は國^{くに}よ^よと^とら^らし^しの^のは^はは^は井^いお^おと^と色^{いろ}り
 是^{こゝ}も^も云^いら^らは^は期^きお^おま^まら^らは^はら^ら 六月云^いの^のえ^えお
 乃^な期^き日^ひ母^{はは}婦^{むすめ}と^とも^もて^て加^か須^す利^り君^{きみ}の^のい^いは^はら^ら
 云^いら^らは^はら^らの^の名^なを^を記^しす^すよ^よお^おい^いて^て見^みと^とら^らなり
 云^いら^らは^はの^の見^みと^とも^もつ^つけて^て鴻^{つるぎ}君^{きみ}と^とら^らは^は軍^{ぐん}君^{きみ}
 と^とも^も云^いら^らは^は一^{ひと}船^{ふね}と^とも^もて^て鴻^{つるぎ}君^{きみ}と^と國^{くに}よ^よと^とら^らは^はと
 武^ぶ寧^{にやう}と^とら^らは^は百^{ひやく}傳^{でん}人^{にん}の^の名^なと^とら^らは^はと^とら^らは^は主^{しゅ}鴻^{つるぎ}

とつふたり 秋七月軍君京りしまつとて
めて吾子あり

百保新撰かのもろしのごう蓋園主
才現支君とまゝして大倭ぬまうで天
皇ぬはるまゝじもと先主のうらと
おさし

去る二月の元祿の朔三日の卯の日
天皇伯瀬小野ぬあをまよと山野の藤原
とみそありあけひこおひとあうて

奇よりぬはるはる

こもりをのり路のやまといふち乃
と終一にやうしてアてのう終一
御前のこりきりしはせりやほあわ

ぬうきつあやめうくう

と小野と名はして道小野といふ

三月かのつえの朔三日の日天皇后妃
ととて素こゆもて蟹ふとつ
とあしんとおぼしめ螺嬴人のおぼせて

むし三十人とまゝして前津屋あひ母族七
十人ととほさしむら佐備の上道乃佐田
株おほ海とみしをらんをりてさく人母
稚媛と朋友みあめらりて云天下の母よ
乳人いしが婦みまぐいそらん海屋り
さくやみしてとほくの好そふらりあ
らしたみむらよさくくのたまりあも
ほくらいたか色そつろとほは曠世よるひま
進ちんあつりてむらりすく人
なると海りと天皇るはうもあてらる
りたらめて見らあめらあをに給ふ
とふに他いれら稚媛ともめて女侍
給んとお海乃田授とよそりて任那國
目あろり給えらりて稚媛はあ
田授乃稚媛とよけて兄弟君とらあや
別あめ云田授乃婦の名は毛媛いら
らるるの襲津彦が子玉田宿禰むとあ
あり天皇身貌陶籛

鉦花弗御

蘭は無加

相

曠世

侍

籛

夫とらへししてさしむるに

田た授さとてよ任所にんじょおおかいてて天あ皇みのま婦めとつ幸さい

けりととうけも海うりてあとけとりとめ

しとありとく新しん羅らいとりとありとり

中ちゆう國こくおしくととと天てん皇わう田た授さ臣しんの子こ才さい君きん

とと右みぎ備びのう海う部ぶ直ちゆう赤せき尾びとに見みとりして

あい海うとくあいとく新しん羅らとうてう

あい西せい漢わんのた才さい伎ぎ歡くわん因いん知ち利りみととととととととと

あいとととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととととと

ありてはさしつととらふ老女とらふあつてく云まはし抱
きと一日あつてつらねあつて牙君とらふの
地とてあまの国あまの国あつてつらねあつて
百済あまの国のあまの国あまの国あつてつらねあつて
海の中あまの国あまの国あつてつらねあつて
とらふくくつらねあつてつらねあつて
任那あまの国國司
田後あまの国后あまの国らあつてつらねあつて
とらふあつてつらねあつてつらねあつて
君と戒あまの国てあつてつらねあつてつらねあつて

てつらねあつてつらねあつてつらねあつて
は井あまの国あまの国あまの国あつてつらねあつて
わづらあつてつらねあつてつらねあつて
川へあつてつらねあつてつらねあつて
ながあつてつらねあつてつらねあつて
日あつてつらねあつてつらねあつて
らあつてつらねあつてつらねあつて
あつてつらねあつてつらねあつて
あつてつらねあつてつらねあつて
あつてつらねあつてつらねあつて

多んでむとにそらまことりて祿やの他
盗
うかくうげんととふくら海部直赤尾
と百瀬らたあまのりる年未乃才伎と乞
此のく大鴻うらんつり天皇才君のらん
将
角くぬと越さうめて日鷹吉士堅磐固
安錢とまふと使ともぬりしと中さつ
井ぬとふく他倭國の吾礪乃いろはほのじ
らよらんつりてやうわりものおほしなま
安直
して天皇大伴大連室屋ぬみとたりして

東漢直掬ぬおほくと新漢陶部高貴鞍
部堅貴吾部因斯死我錦部定安那錦
譯語卯安那ホとて上桃源下桃源美神
原三所ぬうけしんしんしんしん

或は云吾備臣才君とらりまうらん
里下漢年八部衣縫部害八部とこさ
まのりる高部とよま次上同じ

八年去二月身換村まき櫛根民使博徳と
使
て其のまきとて其國ぬまきとて天皇のあまの
即位

日つゝと路一歩一歩と歩みしむるま
あつゝの國をいひてはなつてはなつたて
らふはと今も八つ方ありとてはなつたて
中國のこゝろはとあつてはなつたて
めあつし是にいと高麗王精兵二百人
備へてはなつたてはなつたて
はと高麗のいゝとてはなつたて
はと人あつたてはなつたて
はと人あつたてはなつたて
はと人あつたてはなつたて

國のあつたてはなつたて
一本云はつたてはなつたて
久一か

あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて
あつたてはなつたて

らりとしてとりてさしなくも其國のわきを
高麗人とし給とてさし高麗よまらるる一人
部間の事とてさし給えて主國よに
入てこれにさし高麗王とてかへりて
おらして筑是流乃城武吉支城といふ
は井かこゝにまひて樂とておらして新
羅王夜ら梅のいくこの四面りてさし
さして賊のさしなくも其國の地よ入て
さしわらわらんと任那王のりてさし

高麗王我國とてさし其時わらわら
らるるのわらわらるるさし其國のわら
わらとてさし高麗とてさし高麗よまら
るる一人とてさし高麗よまらるる一人
部間の事とてさし給えて主國よに
入てこれにさし高麗王とてかへりて
おらして筑是流乃城武吉支城といふ
は井かこゝにまひて樂とておらして新
羅王夜ら梅のいくこの四面りてさし
さして賊のさしなくも其國の地よ入て
さしわらわらんと任那王のりてさし

もろくのりくさるにんいきさうりその信等
将とあひぬがなびてみかおと信
怖信等と
 かく他はめくしくさ成カ祿勞軍中
 みねりこちてと促やめとあ人成攻具て
 里いしめくさうしじふ高藤とあひ梅を
 ねと十日あまりじかから夜さ冷さ前と
 うづらて地道うづら成たしてしく冬り轡
 車とや過奇兵とまうきつりあけあめ
今明り高藤しまでの信とおろ進んとはらと
 ねりむ調とくくさうしにらりてあはれ
 他奇兵くちうひんとしかはくと他歩し騎し言し新
 けも拾めて夾たよれ成屋そのとちつり信二國新
 乃交恐まこまりしてなまり新信新信新
 里て法云法は法らりて法員法成法も法らりて法
 ね母河い建里官軍弱とくし海法からあは
 志乃業ぐきて海さよ人の地法またりあ法んと
 此役業母今より業あ業る業た業あ業に天朝業と業し業た
 ちあ業ら業し業や

九月廿二月三日元祿の朔日元河内直香賜也
おぼろけのちのちのちのち
 采女とばまきして胸方の神とす
しんか
 先給ふ香賜とす
しんか
 是て海より事とおありんうはるよとんで
 まう神ありとお打り天皇これときこめ
 ちぬはまりく神とすつりて福といのり
たにのひのちのちのち
 はらゆぶるまやとれら新波日鷹吉士
 とまこて海よりこれと給うしむ
 香賜とすかへ他あけとてとんつと天皇

まう予削連豊穂とまこりてあり祿を
やけのしし
 河内縣もととめこじつ井よ三河の郡藍
あいの
 原めとてと海に
斬
 新給とすんとおぬと神天皇よ
とま
 一めとれいほりくた
往
 紀小予宿祿菴我
まのちのちのちのち
 韓子宿祿大伴族連小鹿火宿祿等よ
 りりしてれま
り
 新給西の去よあり
新
 葉とがきめてと
果
標
胡聘

しくく貞職まじりにまはり朕が天下め五
 多ふめしん身とけい海の舟に投て流
 と匣籠の表よくだ高麗の貞と婦と取百
 康乃城とのいんやあさ海りてるると
 とくめ腕て貞職おさけりし如根子の
 あささ海あり飽ていさり創てしにけは
 りのまらちきつて越もてしとまら
 大将たしん王仲として天爵と給めら
 ちあはしん見たにまらけめ紀小弓宿祢大
 侍室屋大連とて天皇めらまら海りして
 まらさしんほさくよりしとまらつてん
 ちあはしんしめりしけめらまらあし
 今臣婦みりたりたる除あり臣とよく視
 者らとて公らみらるる海りまら事
 してはまらに天皇めまら給らめ大侍室
 屋大連にまらめ海りまらとまら天皇まら
 りてまらひなまらたまらて吉備の上道
 りう福あ大海とて紀小弓宿祢またらひて

多にふ^道屋^詳の^{取別}孩^環め^取ま^取る^取もの^取伯孫^取く^取し
の^取雨^取と^取さ^取ら^取り^取て^取し^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取馬^取張^取へ
あ^取ひ^取さ^取ら^取て^取ま^取し^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取伯^取孫^取張^取と^取え^取て
し^取か^取ら^取ず^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取し^取ら^取ず^取ら^取り^取入^取
て^取ら^取ず^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取馬^取張^取く^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取し^取ら^取ず^取ら^取り^取
あ^取く^取ら^取ず^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取去^取馬^取り^取た^取ら^取ず^取ら^取り^取
伯^取孫^取心^取り^取あ^取や^取し^取ん^取て^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取卷^取田^取乃^取陵^取よ
り^取と^取し^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取り^取て^取し^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取土^取馬^取の^取間^取り
あ^取る^取は^取み^取と^取ら^取り^取て^取代^取へ^取す^取ら^取ず^取ら^取り^取て^取土^取馬^取を

に
に

十年秋九月亥の^{いさのど}ころ^{あど}の^い朔^{すう}は^しち^ちの^え祿^{ろく}
乃^{いさのど}日^{あど}身^み狭^ひ村^{むら}主^{ぬし}喜^{よろこ}具^ぐり^もく^くも^も川^がま^まか^かの^い
駮^はと^とて^はは^はく^くま^まか^かの^い駮^は水^{すい}間^ま君^{きみ}乃^の
犬^{いぬ}の^いた^ため^め嚙^{くは}ま^まく^く死^しぬ

別^{こと}が^がぬ^ぬ云^いこ^この^い鶺^せ鴒^りく^くの^い嶺^{みね}あ^あき^きわ^わ泥

麻呂^{あそ}が^が犬^{いぬ}の^いぬ^ぬめ^めく^くり^りと^と死^しぬ

是^{こゝ}小^こく^く水^{すい}間^ま君^{きみ}に^にあ^あて^てら^らす^す
と^とぬ^ぬと^とし^しら^らり^りて^て鳴^{なり}十^{じゅう}侯^{こう}と^と長^{ちやう}治^ぢ人^{じん}

と成ぬくつりては...
海うら天皇...
うの朔かの...
はまは...
二町めと...
十一年...
乃...
侯...
川瀬舎人...

らりめげ...
貴信...
人なり...
ら...
田...
海...
ら...
直...
直...
直...

にたりあゝぬかきぬまらぬとあはれ
あまらりけん今天皇一乃らりのせうり
あゝの面とぬかきぬまらぬとあはれ
いしりあゝき海一まな主ありてまはりて天
皇にりりてはまらぬとあはれ直丁
ホたらまはぬかきぬまらぬとあはれ
名倉部とあはれ

十二年夏四月乙のえ祓の朝つらのせうりの日
身狭村主とあはれ 槍隈氏使博徳とあはれ

冬十月乙のえの朝つらのせうりの日
しらの日天皇本立園鶏御田 一本云猪名部法
みね海部とあはれのほらり法部とあはれ御田
樓みねとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
いしりにありてぬかきぬまらぬとあはれ
あゝの面とぬかきぬまらぬとあはれ
いしりありてぬかきぬまらぬとあはれ
うみあゝとあはれとあはれとあはれとあはれ

らんとは何して物部^{あまの}ぬさねをさすまはるな
秦^{あまの}海^のぬあひん色うたにらんつり琴の^{あまの}志とて天
皇よささうしをちまひらんとかりてて琴とよ
らんといひて云

かじり給のいその経路乃奴のほろえとあり
たけてつに多るまきくおねのきんり
うしきけくまのしんもいれらもか
くもつとつをうりてえんやあさうを
ぬらんや

らんぬ天皇皇琴の志はささり海してそのほ
えと持新し給り

十二年壬辰三月携穂彦の玄孫^{あまの}齒田根命^{かき}ひ

そした采女^{あまの}やまの^{あまの}乃小治子^{おのこぢこ}とて帰り天

皇記しりて齒田根命とて物部^{あまの}目

大連^{おほつら}ぬさつけと路のさしめ給ふ^{あまの}齒田根命

馬八匹^{あまの}太刀八口^{あまの}越りくははら^{あまの}つらと

核除

てめい^{あまの}奇^{あまの}うして云

あまのくさし海いりてて給

うぬのやはめくわ〜きくもなり

目大連うぢとてらは越こえまらして天皇あまの菑田ついで根命の

らぬ〜物とてわたからぬ餅もち名な市いち色いろ橋はし本もと

のふよ〜〜（前略）は井い井い餅もち名なのの長なが望もち色いろと

〜物部ものべ目大連うぢまたま（前略）秋八月あき

ら玉たまの御おん井い隈かの人ひと文石ふみいし小麻呂こあさろらら

心こゝろりりいいまま〜わわ〜てああ〜〜ささ〜海うみふふわわ

ありありみみららの中なかよよちちわわ〜つつ〜にに〜〜ららいい人ひと

はかはか〜〜たた〜まま〜ああ〜ささ〜びび〜のの〜〜とと〜てて

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ぬぬ〜ひひ〜ぬぬ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ここ〜天あま皇すめみこと喜よろこ日ひの小こ野の信のぶ大おほ樹きととつつ〜たた

貴たかひひをを一ひと百ひゃくとと〜ささわわ〜らら〜ひひ〜らら〜ひひとと

りり〜宅たくえとと〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

らら〜らら〜らら〜ああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ぬぬ〜そのその〜信のぶ〜ささ〜馬うまのの〜〜大おほ樹き信のぶたた〜まま〜わわ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜他た文ふみ石いし小こ麻あ呂ろぬぬ〜ららぬぬ 秋あき九月きゅうがつ本もと二ふた猪いの名な

部真根石として質うて芥とりて杖と
 きげにやまのふとさうのまどもあやまひて及
 とあづくと天皇その所より海へてあや
 こらけとあはれ海へはひのよ石よあやまり
 あくざらや真根こころまうさういかにあや
 まらんとまうはじかいら糸女とほよて衣裾
 とあが海へあまふとあまふとあまふとあまふと
著續 阜
 真根志とあや
 てあまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
 ちあまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
奴
 あまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
真
 らあまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
物部
 あまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
真根
刊 あまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
同伴巧者
惜 あまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
作 して云
 何れに井あ人のあまふとあまふとあまふと
 かしとあまふとあまふとあまふとあまふとあまふと
 見えあふと

天皇この事と記さしめて人にて悔とほ

あつてなげきておの海へ海へ人

御惜一なるひつるや喟なま類地歎ゆる教はひさ

て。むのを終らぬよの路とせせて刑あらと所

みししりくや止くゆるし徴ゆる經ひつる

とく作成してま作事とく作て云

ぬる海のひのろ終らぬる徴経

いぢら志ふま徴むのくろる海

一ぢいぢら志ふま徴とく經

十三年春正月むのえらうの朔徴けららのえらう

乃日身徴狭村徴主喜等徴兵國徴乃使徴とく徴と母徴兵

より徴ぬく徴ま徴し徴ぬ徴ふ徴平徴末徴才徴伎徴漢徴織徴兵徴織徴と

む徴衣徴縫徴兄徴媛徴才徴媛徴木徴と徴ひ徴さ徴わ徴く徴任徴吉徴津徴日

る徴海徴の徴の徴月徴兵徴客徴好徴さ徴め徴り徴道徴と徴磯徴齒徴津徴路

ぬかより徴海徴兵徴坂徴と徴り徴川徴を徴三月徴信徴連徴よ徴み徴との

りして兵乃使とじしてとふら兵人徴と徴橋徴

隈野徴み徴ん徴倉徴し徴じ徴り徴て徴兵徴原徴と徴あ徴つ徴を徴

衣縫徴兄徴媛徴城徴と徴く徴大徴三徴輪徴乃徴神徴よ徴め徴と徴ま徴り徴

才媛として漢衣縫部あやのぬいとなり漢織兵織あやのたれ
衣縫ぬいとよきあとの衣縫部あやのぬい仔細衣縫あやのぬいとあり

夏四月乙未己卯朔日天皇兵人つれいよきあり

海らびとておぼして他きつらぬらぬらぬ

とておぼし海らぬその共食者あひけひたきりよらん

海らぬを他たらぬらぬ根使主ねのしよかん

天皇と家い他根使主ねのしにみしおぼせと共あひ

食者けひと治時井中石上いさのみる援原たのりお

わく兵人つれ小郷食こごたまふ時お志こころのいお舎人しや

海らぬよきと見さしぬらぬと録り後命

と海らぬとてまうとを根使主ねのしがつけぬら

玉たまびらぬらぬとておぼしとておぼしとて

また兵人つれの云いえぬらぬとておぼしとて

海らぬとておぼしとてまうとておぼしとて

とておぼしとておぼしとておぼしとて

とておぼしとておぼしとておぼしとて

とておぼしとておぼしとておぼしとて

とておぼしとておぼしとておぼしとて

敬啟

佛衰

天皇と別ておこまりく位いざらたまりや皇太后こうごう床しど
 ちりおりてさる御く申したるく母玉の
 雅みやび昔むかしやほこ兄いもうと大草香皇子の定あきら極たぎ天皇
 の御人みひとと御まけけておけりまは陛下てんか下くだめ
 ちまうり給ふと御妻めづめごもよたごま向むかは
 なら故ゆゑしこむと根使主ねぢぬしみづうてとらよ
不覚
 ろうぶちりてさるらんアと御したまふ
 天皇にうりやがらうとて大よいらておは
 根使主と治りさる根使主とてまうさ
 冬ふゆう御みちり御みした信のぶあやま他たありま
 と根使主ねぢぬし一ひと足あしと御みしたるく今いまちゆ
 冬ふゆう御みちりこのころやをばさるまらさるのつ
子孫 十聯 節
 みまあけりそと御みさまひてとが他たれと
 き御みんと志し給たま根使主ねぢぬしあげかされて日根ひね
ころま
 ちりして稲城いなぎとほりてまら御みつ井い
 官軍くわんぐんのたあしころされぬ天皇はさく母
有司
 足あしとおね給たまと子孫こひまと二つ御みけけてとらと
大草香部の民たみとなしてと御み御み封ふう

ぬまふ二分と、茅津の縣主もたまふてふら
しはさむとくはなうら難波者吉日者
子孫ともあはれ姓とあはれ大草名部
者士とんかの日者、信、穴極、天皇の紀よ
あり事平てうら小根使主根使主が子なり表
て人ようらとあはれ天皇の城うらうら我
父の城うらうら天皇けてよの信とらう
やうらとて根使主の宅とえとてあはれ
ぬまふとたその云うとてたててころうら
根使主があら坂本信とてなることらとらう

しははれ
十の日の秦氏あはれ他て信連等あはれ孫とて
うまいたとて駈使秦造とて信とてあはれ
はれとて秦造酒とてあはれとてあはれとて
天皇あはれとてあはれ天皇うらとてあはれとて
あはれとてあはれとて秦氏とてあはれとて秦酒とて
たまふとてあはれとて百十種の勝とてあはれとて
ものうらとてあはれとてあはれとてあはれとて
朝廷 充積
庶調

く姓なまとあうむて。禹うづ夏麻あま佐さとふ

一云禹夏母利麻佐うつむりまみか盈こほにめりかから也

十六年秋七月みりりなと宣のり業なり國くに縣あがた也

うう夏あ心こまま秦しん氏し城じやうああららううほほててははくく

里りものものりり成じやう毎まいととまましし。冬十月みり

りりして調漢部あやへと聚あつててそのつ侍造しやくざうととううて

姓なまとあうむて直ちやうととふ

一云漢使主等あやのかしら姓なまとたうむて直ちやうととふ

十七年春三月むののららのの朔しやくははららののええうう

乃日去師連等ゆめししやうみみんんととりりしてああくく接せつの

御おん膳ぜん也なり乃の信しん忌ぎととああくくままりりははららののええうう

乃去師連祖吾ゆめししのむら首あけととははののななににのの来く接せつ

接せつ村むらををままりりののららにに乃の也なりりり俯見村ふけんむらをを

乃多のににのの友とも形かたち村むらとと乃の丹波にんぱももららままいいああくくの

私民部しじんぶととああくくままりり乃のああ氏しををくく贄ひ土師部つちしへぶ

乃

十八年秋八月ははららののららのの朔しやくははららののええうう

乃日物部ゆめものべ菟う代しろ宿しろ祢ね物部ものべ目連めれんととままりりててははくく

宿禰にた行きて二日一夜の弓矢朝日部あすひのべと
 卿とあるは志し物部目連めづらは
 弓部きうぶの物部の大斎年越ひさわく朝日部あすひのべ
 とくくは語しけしとまうと天子に告げし
 事ありしは海してしからら菟代宿禰の
 もてる猪名部と奪て物部目連めたる
 十九年去三月をえこの朝にちのえ
 乃日みしりして穴穂部とをく
 二十年去去藤原大なりしくはたしりて

百保とうちりりほとらめとらり美とらり
 乃りの遺もごとくありて倉下くらしたみん
 兵糧へいりやうとごとくほきてりさはるる
 らいよ藤原の将もろくののしり
 して云百保の許なりをのりたり長つ
 ぬらしたるめあをほとらり失つと
 かしきるまのしりあんらふは井
 らりんの王の云不可もあらんふ寡人かのことく百
 保國し日本國の官家としてありと
 新由未

を久しき入て天皇にまじりて
りともとにちる事ありとてはあやむ
百済記云蓋鹵王のとき卯のうの冬
狗の大軍三つり大城と坊しりて七
日七夜王城をりあはに井尉礼國
とういふ王とび大后王子みみ敵
れのみ後ぬ

二十一年春三月天皇百済を築めり
海をきあはれりて久麻那利とて

汶例王のむらむらとくま國とくまむらむら
人みな百済國也
いんじんまらとくま海とて天皇のた
すのうむらりてまらこま國とてまら
汶例王の蓋鹵王の母なり
日本旧記云久麻那利とて末多王に
たまふまらとくまはあやまらあり久麻那利
任那國の下味呼利縣之別邑なり
二十二年春正月けらのとらりの朝日白髪

子成りく皇太子とて 秋七月丹波国餘
社のこり菅川の入水江の浦嶋の子舟
ありてけりとは井一六飛とて
とあり他女もあはらむとて子感く
く婦とてわい志くひて海入わ
よくめらりて仙居とらりる語
をあり

二十三年夏四月百瀬乃文行王薨ぬ天皇
支主み子の中み姉らみつる末多王

王乃王くしてさきとりくみありし
内裏みりて西とけりえ
神人ころめてを國みとてそ
るるありあむは多の玉のいさひ
六百入りて西國み海よりと
是東城王とて百瀬の
乃例みまらり 氏多の安致馬飼
臣亦あかりとて言さわく言
秋七月ののらり朝日天皇

寝疾不預

ぬまきみとありしてまじりておぼえておぼ

賞罰支度事

いつこのみこ

からちいさきとなくあつてむい皇太子よ

祿ぬまきみ八月かのえしらの朔迄のえ祿の日

天皇やまひ侍よくあり甚百寮つひと

評詠

給ふと極てあけき治大敵み崩ありり

と大伴室屋大連と東漢掬直とみわらの

道詔

えとありしてあつていさく海さみ今あめのいひ医家

して烟火けうと紙せん百姓ひやくしやうにさ海りやとく

万里

艾

安

て素すとあひいぬふれまいあもりから

宿

脹

天

意

多にのう他とやとつてめんとおぼえて

扱くへりマが治めおのましとんぎまりて目に

一日とほしいしとなまぶいおねんぬい

らぬめのけいあり長連伴造をぬくみを

毎日

朝奉

まりり國司郡司とまさめのぞんてまりて

朝集

こいみんぞ心府とほりていまりみり

しらと祢んごらあらんやしらしすからら

義

君はらり信の父子といひりこいみらくし

既し連こらりて内外らの終らし心をりりて

智カ

家國とにさあむとくあはれ海さみ敬厚は連み
あり初くしれとねんぬに即しりな
いれあしき孫くねんぬめめ
らるる子孫しけくまて大業となら
ぬぬりこれ朕が家事しり
くく大連等民部廣大て國
地みり皇太子地まらあのみこたわれ
里むと試んぐとあや志るるあ
あめりその志るるありよ朕がうら
とたり堪めりとて試りてとて天下と
にさあむ朕瞑目とてなんともしり
一本之皇川まらあ心あ
天下みありてさあえり幸あ
朕崩らり海に皇太子とあはれ
ホ民部らかりり多あり努力あ
とけよあがらりめ
あの時新羅とて將軍右備長尾代行
右備國とてりて家りり後り

家國とにさあむとくあはれ海さみ敬厚は連み
あり初くしれとねんぬに即しりな
いれあしき孫くねんぬめめ
らるる子孫しけくまて大業となら
ぬぬりこれ朕が家事しり
くく大連等民部廣大て國
地みり皇太子地まらあのみこたわれ
里むと試んぐとあや志るるあ
あめりその志るるありよ朕がうら
とたり堪めりとて試りてとて天下と
にさあむ朕瞑目とてなんともしり
一本之皇川まらあ心あ
天下みありてさあえり幸あ
朕崩らり海に皇太子とあはれ
ホ民部らかりり多あり努力あ
とけよあがらりめ
あの時新羅とて將軍右備長尾代行
右備國とてりて家りり後り

むさわの五^い百^がの蝦^え夷^いホ天^{てん}皇^{わう}くれし
うけめりり^めと家^かに他^たあひ^ありて^て吾^わ
國^{くに}と^とど^どお^おら^らめ^めし海^{うみ}と^と天^{てん}皇^{わう}と^と崩^{くずれ}ぬ^ぬ
は^はく^くな^なぶ^ぶく^くひ^ひて^てま^まら^らあ^あい^い
い^いと^とんで^で傍^{かたがは}郡^{のミナト}と^とあ^あり^りあ^あぶ^ぶく^く尾^お代^{しろ}
家^{いえ}り^りこ^こり^りて^て蝦^え夷^いホ^ホ安^あ婆^わの^の水^{みづ}門^{かど}あ^あ
て^てあ^あい^いめ^めし^して^て蝦^え夷^いホ^ホと^と射^やぬ^ぬあ^あい^いお
ご^ごり^りあ^あぶ^ぶく^く伏^ふて^て糸^{いと}と^とり^りの^のぐ^ぐは^は井^い射^や
く^くと^とら^らび^びり^りと^と尾^お代^{しろ}い^いつ^つら^らし^し海^{うみ}邊^べ
乃^の上^{のうへ}め^めに^にら^らり^りか^から^られ^れ一^一者^{もの}二^{ふた}隊^{たい}と^とい^いこ^こら^らと^とり^り二^{ふた}
葉^はの^の糸^{いと}と^とて^てめ^めけ^けら^らぬ^ぬと^とら^らぬ^ぬ他^た船^{ふね}人^{ひと}と^と先^ま
一^一糸^{いと}葉^は張^はら^らぬ^ぬ人^{ひと}に^にそ^それ^れて^て自^{みづか}近^{ぢか}ぬ^ぬ尾^お代^{しろ}
と^とな^なく^くち^ちら^らと^とて^て糸^{いと}と^とり^りて^て哥^{うた}と^とて^て云^い
ん^ん他^たり^りあ^あぶ^ぶく^くと^とら^らぬ^ぬこ^こら^らぬ^ぬに^にら^らぬ^ぬ
に^にら^らぬ^ぬと^とあ^あぶ^ぶく^くと^とら^らぬ^ぬに^にら^らぬ^ぬ
う^うぬ^ぬと^とあ^あぶ^ぶく^くと^とら^らぬ^ぬに^にら^らぬ^ぬ
ま^まら^らぬ^ぬに^にら^らぬ^ぬ丹^に波^は國^{くに}浦^{うら}掛^かの^の水^{みづ}門^{かど}に^にら^らぬ^ぬ
し^しと^とあ^あぶ^ぶく^くと^とら^らぬ^ぬに^にら^らぬ^ぬ

一本云ふ川く浦掛ぬらうに
してらうくきころうに

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

